

天下人ブランド！岡崎の城下町はどうつくられた？



DISCOVER OKAZAKI

殿橋

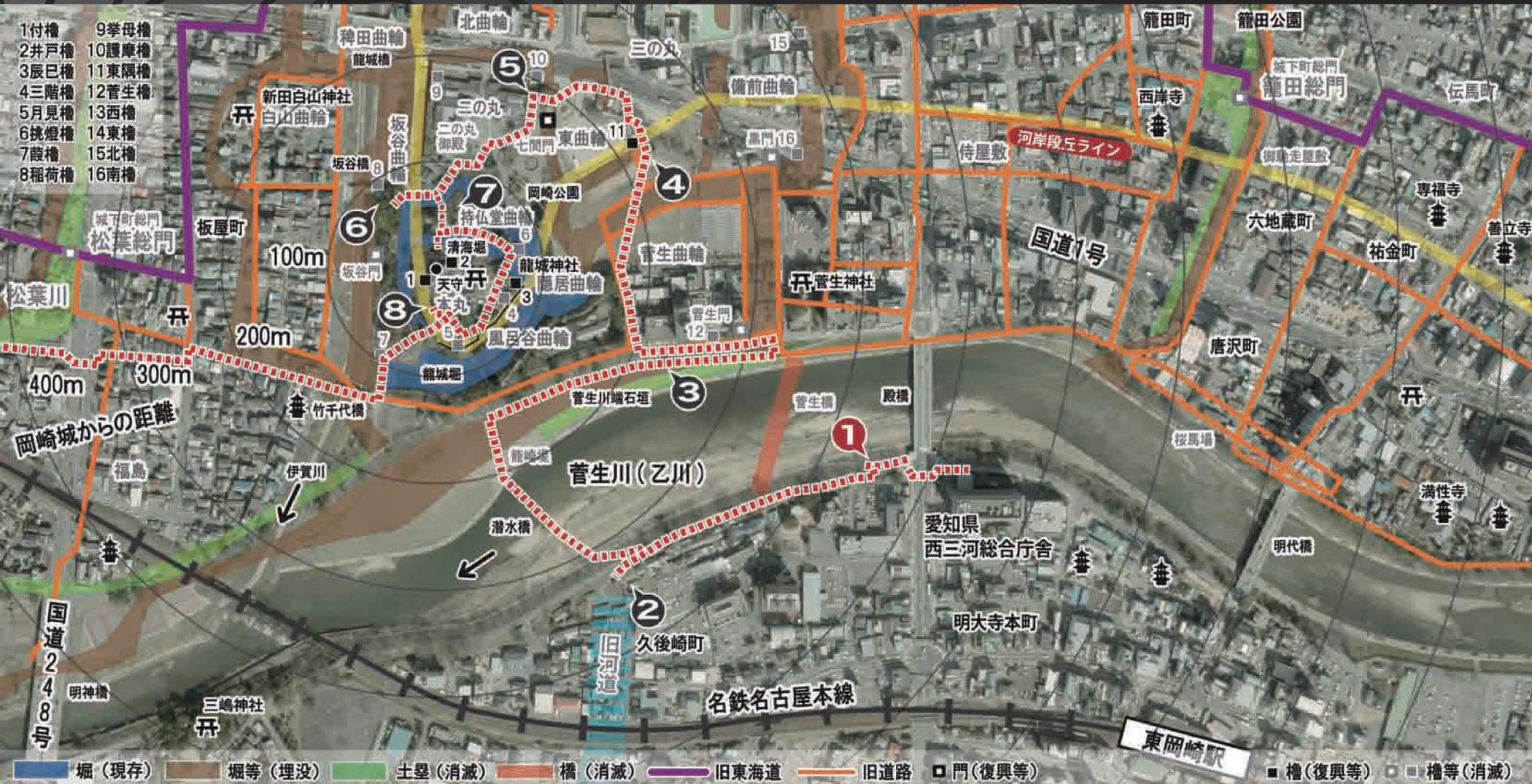
90歳

殿橋

～今年で「90歳」

今も、昔も、これからも

「現役」で地域を支える大切な橋

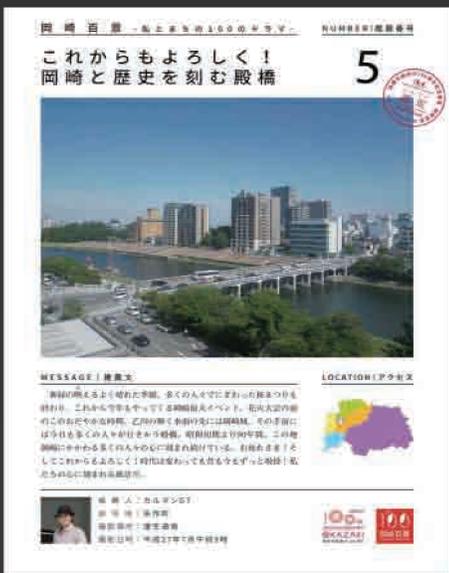


近代土木遺産・殿橋—今も第一線の現役

殿橋は昭和2年（1927）、岡崎の近代化のための一大事業として、最新技術により架設された、全長112.6メートル、12径間単純鉄筋コンクリートT桁橋。昭和初期の姿をそのまま残し、未だに現役で岡崎中心市街の交通を担い、日交通量約2万台を通して「近代土木遺産」である。今年で90歳を迎える。竣工時から昭和30年（1955）頃まで、橋の真ん中を路面電車が複線で走っていた。橋下から見上げると重い電車を

支えるため、中央部の主桁間隔が狭くなっているのがわかる。

上流には、10年後の昭和12年（1937）に架設された明代橋。中心市街地に架かる昭和初期の橋が2橋仲良く並んで当時の姿を残し、しかも未だ第一線の現役でいることは全国的にも珍しく、「岡崎百景」にも選ばれた。この橋は過去と今を繋ぐ、後世に大事に残していきたい大切な財産である。



竣工当時の式典



昭和2年（1927）7月15日に竣工。同年7月19日、愛知県知事を始め、県会議員などが出席する式典が開催され、菅生神社の奉納花火やパレードなどが盛大に行われた。

岡崎の石工による施工



青銅鑄物製の親柱燈は、戦時中の金属類供出により撤去されたが、昭和54年（1979）に市民の手により復元された。親柱は花崗石製で伝統産業を担う岡崎石工らで設置された。

高欄の石材と階段石



昭和40年（1965）に現在の鉄筋コンクリート製に取り替えられる前の高欄は、親柱上部と同じ意匠の花崗石製で、その一部は乙川河川緑地内の階段石に使われている。

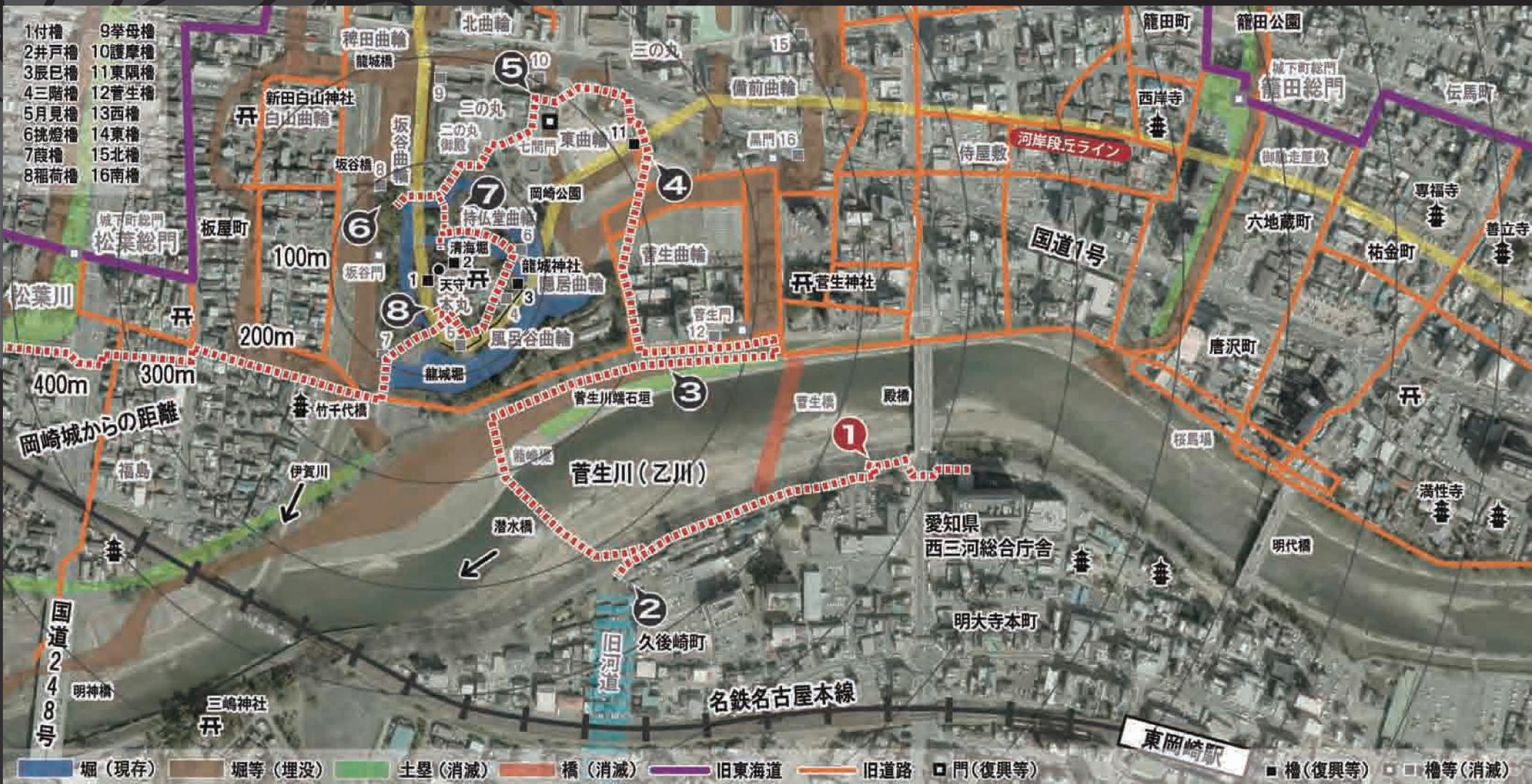
殿橋テラス



近年では、左岸の岡崎城を眺める橋詰めの一等地に「殿橋テラス」が設営され、新たな賑わいスポットが生まれている。



01 もとは こちらが岡崎



平岩城—元岡崎城と西郷氏

岡崎城のはじまりは、菅生川南岸の明大寺付近に居館を構えたとされる西郷弾正左衛門頼嗣により、享徳元年（1452）から康正元年（1455）にかけて、菅生川北岸の龍頭山と呼ばれる半島状段丘の先端に、北方に対する砦として築かれたことによる。

築城当時は、菅生川の南側に鎌倉街道（東海

道）が通り、明大寺が「岡崎」と呼ばれていた。西郷氏の居館が元岡崎城といえる。その後、享禄4年（1531）に安城松平氏4代清康が明大寺より龍頭山へと本拠を移し、本格的な岡崎城を構え、岡崎の地も拡大した。城郭周辺には北東の鬼門へ甲山寺、北へ西郷氏菩提寺の大林寺、南に龍海院を防御のため配置した。

菅生川南の元岡崎城



平岩城は、岡崎地方の領主であった西郷弾正左衛門が永享年間（1429～1441）に乙川（菅生川）の南、明大寺の地に築いた居館。

舟渡と平岩



近世初めに東海道が川北の岡崎城下に移るまで、龍海院表門辺りと対岸の旧六地藏町（現康生通南）付近が舟渡で結ばれ、中世以来の物流や交通の要地だった。

桜馬場と土場



岡崎藩主の水野忠善の代に、岡崎城総構えの東に接して川沿いに馬場が整備された。左右に桜並木があり桜馬場と呼ばれ、船荷を下ろす土場（渡場）としても利用された。

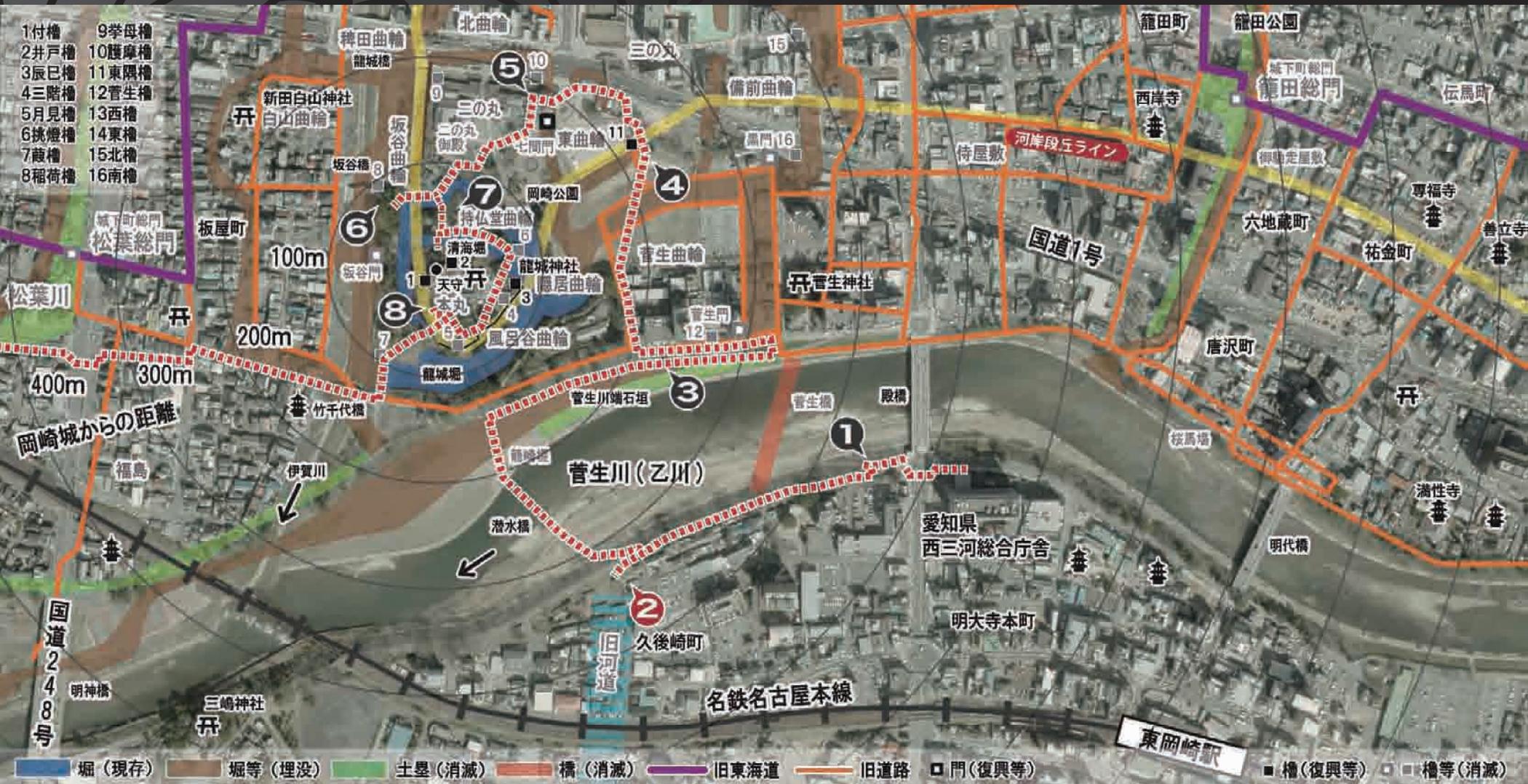
殿橋（菅生橋）



正保2年（1645）、藩主の本多忠利が渡船から架橋し殿橋と呼ばれた。近世には約100メートルほど下流にあった。現殿橋は昭和2年（1927）に親柱を岡崎の花崗岩で架橋。



02 在りし日の川は まちとなった



中世の河川工事—乙川の南流を締め切り西流化

現在、岡崎城の前を流れる乙川は、かつて久後崎町から占部川に流れていた。

旧流路は古くから「流れ久後」と呼ばれ、水害が発生しやすいことから、人々は家を建てることを避けていた。しかし、明治15年(1882)には久後崎で破堤し、死者43名、浸水家屋2,000余りの被害となる。これを機に

本格的な堤防改修が進み、明治18年(1885)に工事が完了。その記念として、また、被害を忘れないために石碑が建てられた。

隣の「三郡輪中治水碑」には「低南堤俗称之水越堤以防城市漲溢之害」とある。これは岡崎城を守るために、昔は城対岸の堤防が人為的に低く設定されていたことを記している。

三郡輪中治水碑



久後崎切れの石碑とともに建てられたもの。三郡とは碧海、額田、幡豆郡の3つを指し、この地域の治水対策の歴史を記している。

水害地形分類図



地理院地図



← 乙川は室町時代に河岸段丘の台地を切り開き、西の矢作川へ付け替えられた。岡崎城は、この河川工事により生み出された西と南を川で守られる段丘の「岡」の「先」に造られた。

← 旧流路沿いに「後背湿地」が存在するのがわかる。「後背湿地」とは浸水被害を受けやすく、また軟弱地盤であるため大きな地震での液状化(地震が発生した際に地盤が液体状になる現象のこと)も懸念される。

旧流路沿いに微地形として自然堤防の痕跡が → 残されていることがわかる。



03 お城下まで 舟が着く五万石の城



菅生川端の石垣と築堤—防御と治水の機能

菅生川は、城南からの敵の侵入を防ぐ天然の堀の役割を果たしたが、同時に本丸際まで川筋が入り水害をもたらした。岡崎藩主本多忠利は、寛永年間（1624～1643）から正保元年（1644）にかけて菅生川に籠崎堤を築き、川岸に石垣を構築する護岸

工事を行った。

これにより中心部への防御機能と治水機能が高められた。菅生川端石垣は、現在でも菅生川の護岸となっている。累々と連なる石垣は、川舟からも徳川城郭の威容を感じさせた。

菅生川端石垣の発掘調査



発掘調査で切れ目ない直線的な石垣城壁として全長約400メートル、総高5.4メートルあることが確認された。一連の石垣に3箇所もの横矢柵形が存在するのは岡崎城のみ。

籠崎堤



治水工事として、菅生川端石垣の構築に合わせ、菅生川中に籠崎堤が造られた。城の南縁にまわり込んでいた川の流れを南に寄せ、本丸から遠ざけた。

ひょうたん池



菅生川の流れを南に寄せた籠崎堤の工事の後、旧河道が本丸南の中堀の役目を担った。五万石ふじの藤棚の南では、乙川河川敷に「ひょうたん池」として残されている。

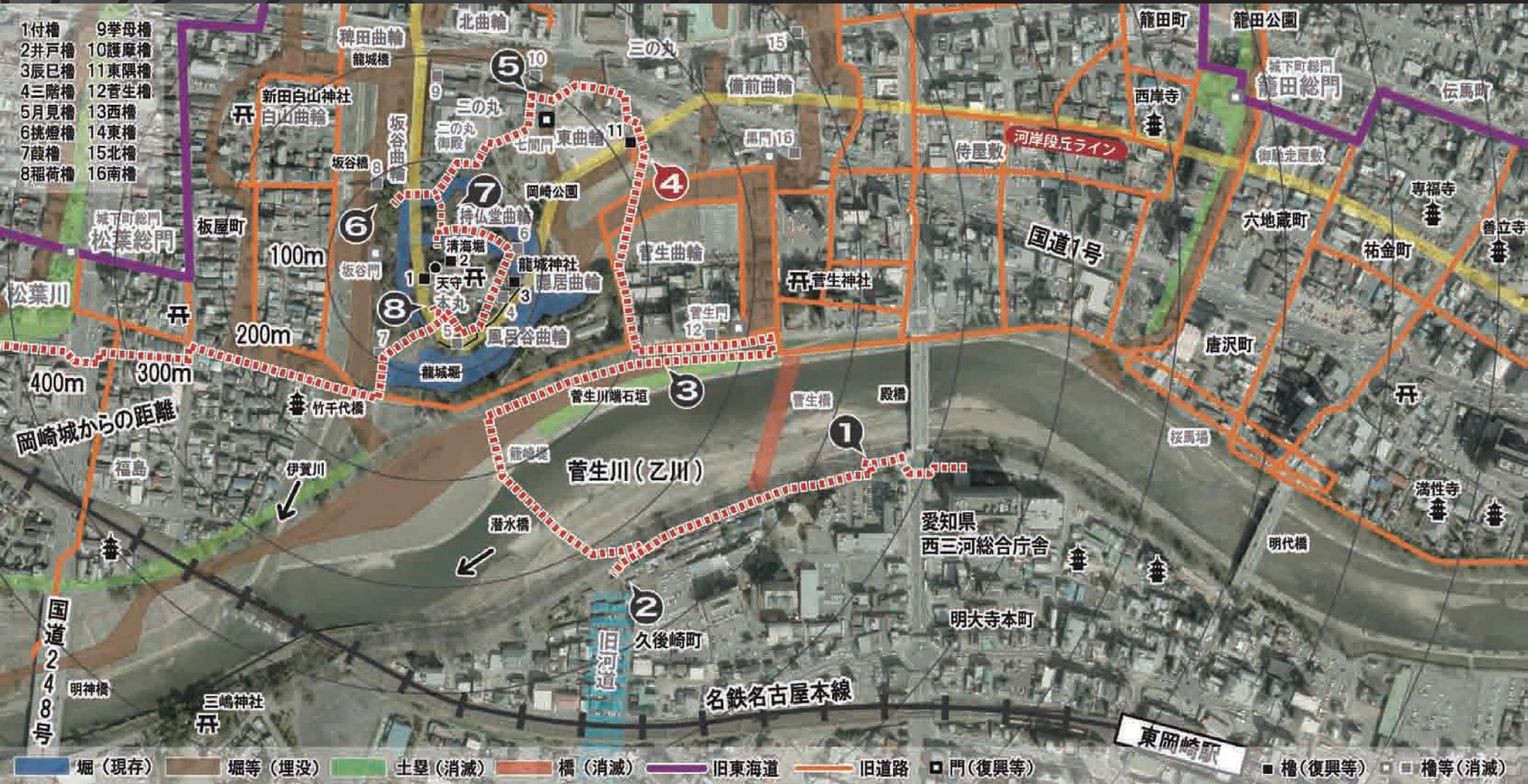
川端からの近世の道



菅生神社西の菅生門をくぐり、城内に入り、菅生川端から侍屋敷の間を通り、菅生曲輪を北へ向かう道が現在の岡崎公園東の道路である。



04 河岸段丘崖を 活用した防衛線



菅生曲輪枡形と東隅櫓—城中枢部への守りの要衝

本丸から隠居曲輪を隔てて東に位置し、本丸より約8メートル低い低地上にある菅生曲輪から河岸段丘上の三の丸に通じる南(東)切通しは、岡崎城が立地する丘陵の尾根筋を南北に切り分けている。当初は空堀として造られ、後に堀底の道として利用

されたと考えられる。

菅生曲輪では菅生川の旧流路であった部分を堀に利用し、平坦面を造り出して屋敷地として使用していた。東曲輪の東隅櫓からは菅生曲輪の枡形と切通しへ監視と攻撃ができ、堅固に守られていた。

※1 城を構成する本丸など一定の広さを持った区画のこと ※2 山や丘を切り削って通した道 ※3 城郭への出入口である虎口(こぐち)の最も発達した形態で開口部が二重になる方形に囲われた空間

菅生曲輪



低地を造成した菅生曲輪には、侍屋敷が置かれていた。発掘調査から、堀や土橋などの遺構のほか、近世武士の生活がうかがわれる遺構が多数確認されている。

切通し



南側の切通しは、両側に石垣が積み折れ曲がる防御の構造で江戸時代に石段が置かれ、現在まで道として使い続けられていると共に近世の景観をよく伝えている。

段丘の堆積土断面



切通しの西側には、中位段丘を掘り切ったことにより、堆積土の断面が見られる。河川の堆積によりできた土層には、角の取れた岩石が多く含まれる。

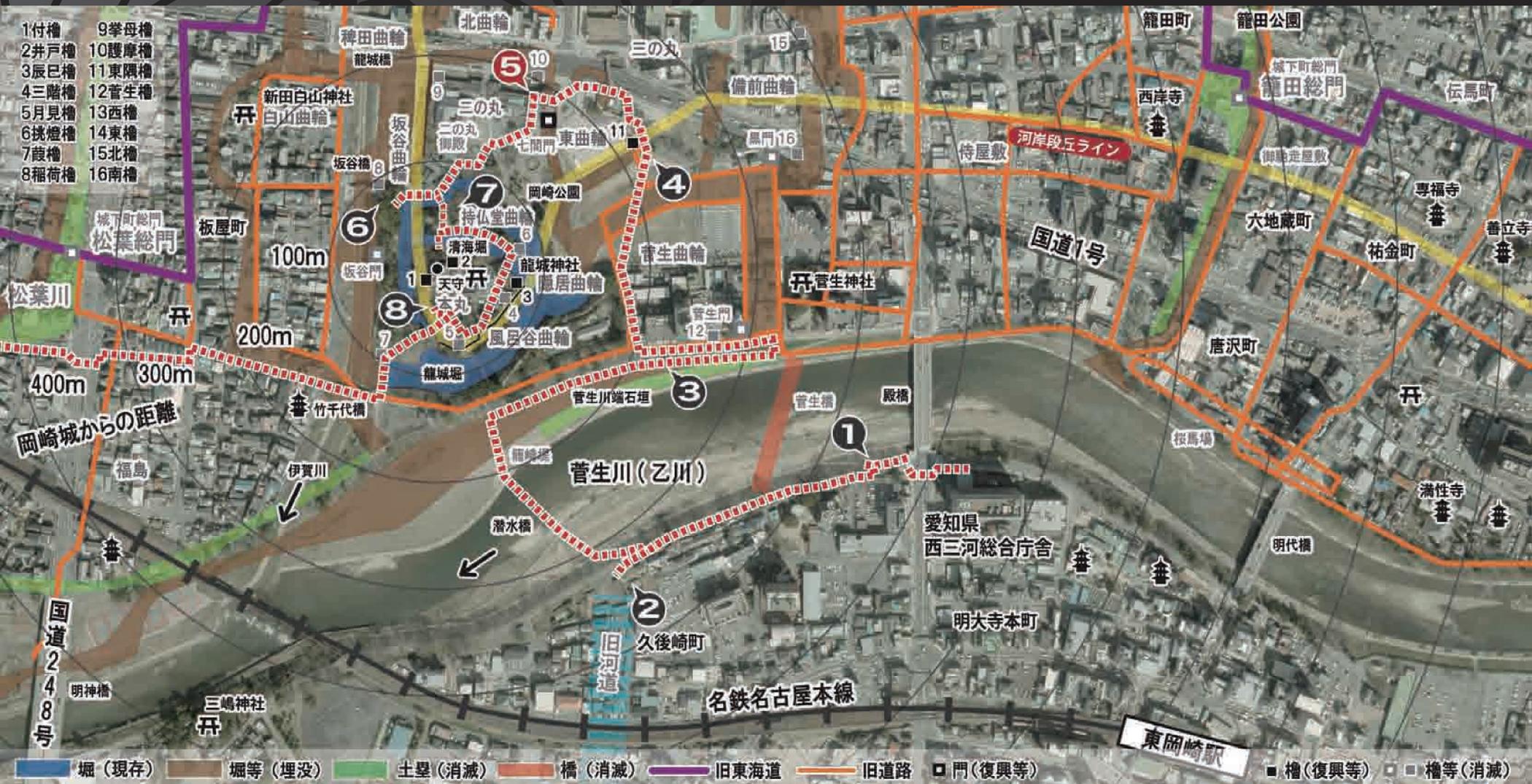
東隅櫓



平成22年(2010)に、発掘調査や絵図を基に、切通しを望む東曲輪の南東角の東隅櫓が木造で復興された。城の中核となる二の丸に繋がる切通しを守る最後の砦であった。



05 殿の御殿は古よりの住み良きところ



二の丸の御殿のつくりー城主の居所と政務の場

家康公が生まれた「御誕生曲輪」とも称される。城主が居所し、藩士たちが出仕した御殿が置かれていた。御殿の屋敷図として「参州岡崎二之丸御住居図」等が存在する。城郭の中樞をなし、延宝4年(1676)の「水野忠善家中宛条目」でも有事の際は二の丸への集結が決められている。西側の

坂谷曲輪との間には段丘縁辺の法面と部分的に腰巻石垣が見られる。近世には、本丸から続く丘陵の落ち際を盛り土して、広い方形の区画としている。弥生時代の生活の跡も見つかり、昔から暮らしやすい場であったことがうかがわれる。

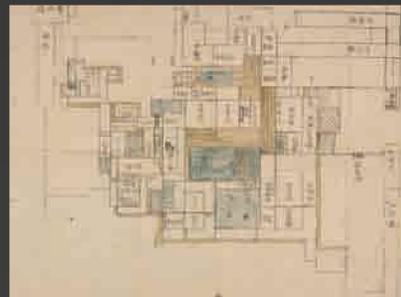
* 土塁の裾に沿って築いた石垣

七間門



二の丸の北東には国道1号に面して平成5年(1993)に「大手門」と称して建設された門があるが、この門の南には七間門といわれた二の丸正門があったと推定される。

二の丸御殿



図面を見ると、七間門のある東側は玄関、大広間、書院などの公的空間であり、城主の居間や湯殿などの私的な空間は「三河武士のやかた家康館」のある北西側に置かれた。

二の丸御殿の発掘調査



これまでの発掘調査で御殿の井戸や石組溝が確認されている。中世以前は尾根筋から下がっていた地形を盛り土して、近世の曲輪としていたことがわかった。

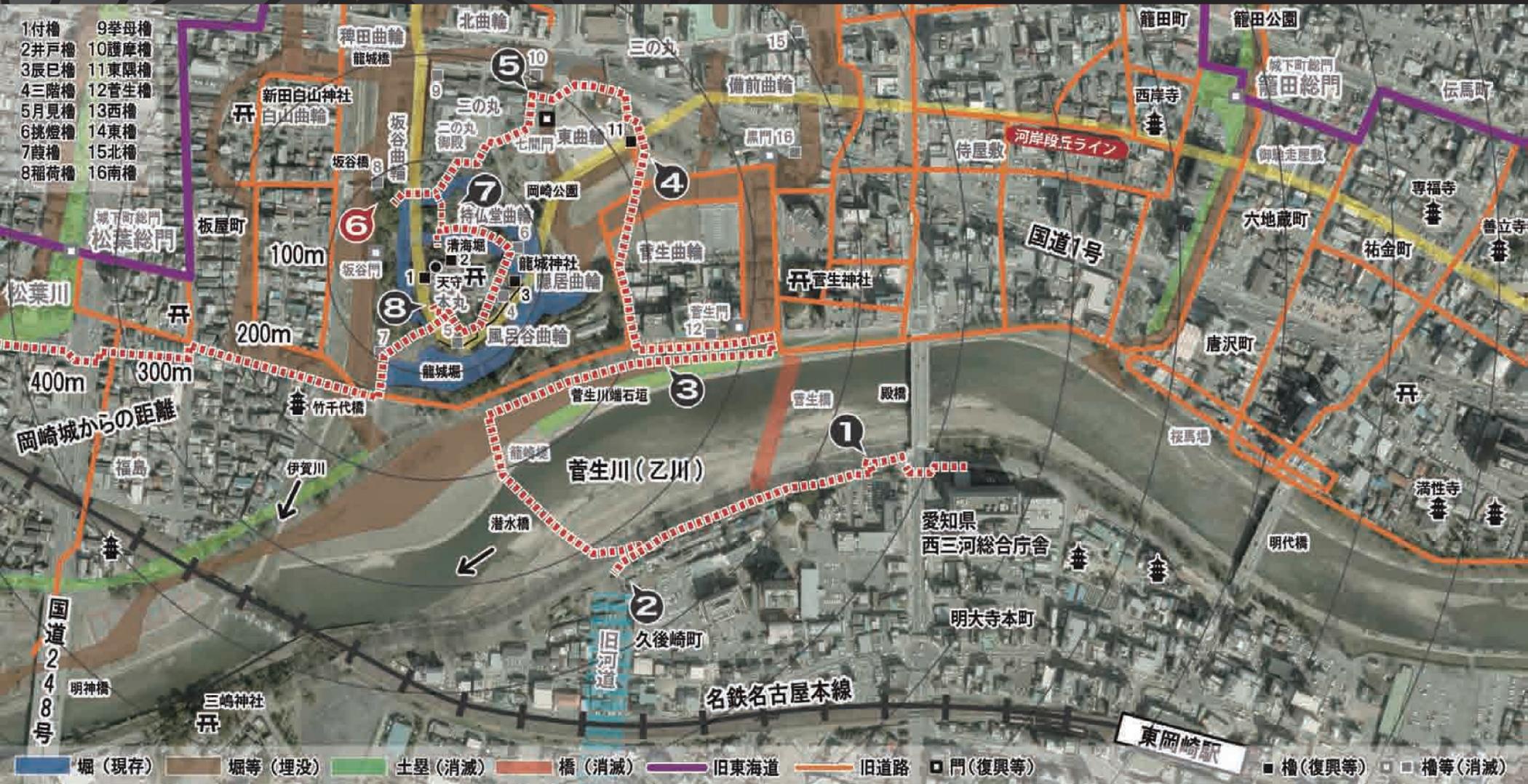
額田県県庁や図書館利用



明治4年(1872)から5年(1873)には額田県県庁が置かれた。大正12年(1923)には市立図書館が開設されたが、昭和20年(1945)に空襲で焼失した。



06 徳川家康公 生誕の地はどこに



搦手の城郭整備—家康公の聖地を残し低地整備

坂谷曲輪は、本丸から二の丸の西側に延びる帯曲輪で、家康公が誕生した坂谷邸という屋敷があったと伝わり、東照公産湯の井戸など生誕にまつわる跡が祀られてきた。搦手方向の矢作川や東海道二十七曲りから見た場合、本丸の天守前に構えられた丸馬出しと枳形を持つ坂谷門が、堅固な守

りと均整の取れた城郭の姿となっていた。当初の岡崎城は段丘上の安定した部分に築かれたが、整備拡張に伴い次第に沖積低地にも曲輪が造られて行った。江戸時代初期の藩主の本多忠利の代までに、菅生川端から搦手の稗田曲輪にかけて石垣構築などの西側低地の整備が行われた。

*1 城を構成する本丸など一定の広さを持った区画のこと *2 徳川家康公のことで、死後、東照大権現として神格化された *3 城の裏口
*4 城の出入口前に設けられた小曲輪の攻撃・防御の施設 *5 城郭の出入口である虎口（こぐち）の最も発達した形態で、開口部が二重になる方形に囲われた空間

産湯の井戸



天文11年(1542)12月26日、城内で産声を上げた家康公産湯の井戸と伝わる石組井戸。平成27年(2015)に井戸の水を汲み上げ、直接、水に触れるようになった。

本丸・二の丸の段差



本丸から二の丸がある河岸段丘の西側は、段丘落ち際の元低地であり、坂谷曲輪との間の空堀は、雨降りの後は水が集まり、一時的に水堀となる。

坂谷門



坂谷門の枳形の基礎石垣とそれに連なる土塁が現在の伊賀川河川敷に残され、龍城堀の西側へ回り込む部分が河川流路の一部となっている。西の丸馬出しと共に整備された。

坂谷曲輪の土塁と水堀跡



坂谷門石垣の両袖にかつての土塁の線が続く。現在の坂谷曲輪と伊賀川間の児童公園は、坂谷曲輪外側の水堀を埋め立てた場所である。